

【エッセー】

ブッシュの二元論と谷崎潤一郎の世界

木内 恵 *Megumi Kiuchi*

(財)国際貿易投資研究所 前研究主幹

「いい人」か「悪い人」か 少年のころ観たチャンバラ映画の登場人物のキャラクターは実に分かりやすかった。主役と悪役は、善と悪、正と邪という人物分類法を基準に見事に類型化されていた。そこには最後には正義が勝つという予定調和的な結末が用意されており、果たしてその通りになった。田舎の少年達を取り巻くこの幸福な世界では、人間は正しい人と邪悪な人の2種類から成り、最後には正義が悪を滅ぼすのであった。

だが、こうしたシンプルで幸福な時代はいずれ去る。少年達はいつの日か、この世には「完全なる善人」もいなければ、「完全なる悪人」もないことに気づく。善と悪を自らの中に併せ持つのが人間だということを知るようになる。人間であることの切なさ、正義が常に善とは限らないという矛盾。こう

した不条理がまかり通る淵源の一つは、この世が完璧ならざる人々から成り立つことに由来する。世界には白でもなければ黒でもない灰色の領域があることをいやでも思い知らされる。老いるということは畢竟、灰色の領域が自己の世界観の根底に次第に滲のように沈殿していく過程でもあるのだらう。

ジョン・ウェインのたたずまい

米国ブッシュ大統領の世界観は最近とみに善悪二元論に立脚する度合いを強めているかにみえる。

ブッシュ政権は成立当初から諸外国を「同盟国」「戦略的競争者」「ならず者国家」という具合に分類する傾向がみられた。こうした国家分類的思考法は、同時多発テロを契機に一層研ぎ澄まされ、今日では善悪二元論に純化し

た感すらある。「米国の側に立つのか、テロリストに与するのか」これがテロ直後にブッシュ政権が諸国家に突きつけた問いであった。敵か味方かのいずれかであって、中立はあり得ない。この立場から発する詰問は諸国家にとっては正に踏み絵であった。

白か黒かで世界を2分するのが最近のブッシュの思考パターンであるとすれば、それは米国の伝統的な体質や今日の米国を支配する時代の気分とどうかわるのか。

物事を単純化するという流儀は、米国民衆の心情に根強く流れる粗野な情念の系譜の1つに合致する。反インテリジェンスの美意識がそれである。反知性主義を体現する一例が西部劇に出てくるジョン・ウェイン的ヒーロー像だ。青白きインテリとは程遠いジョン・ウェインのたたずまいには、その悲壮感と相俟って西部開拓期当時の土気盛んな米国の空気を思い起こさせる何かがある。

牽強付会の謗りを恐れずにいえば、ジョン・ウェイン的西部劇の世界とブッシュの流儀には同根のものがあるようだ。例えばビンラディンについての情報提供を呼びかける米政府作成のポスター。そこに印刷されているのは、

ビンラディンの顔写真と“Up to \$25,000,000 Reward”（最高2,500万ドルの報奨金）の文字であった。西部劇に出てくる「お尋ね者捜し」のポスターとどこが違うというのか。

戦い方に美学あり

西部劇でのジョン・ウェインは身体を張って戦った。今日でも、米映画のヒーローは常に自らの肉体で戦わなければならない。近年の映画「インデペンデンス・デー」では、大統領が自ら戦闘機に乗り込んで1戦闘員として宇宙人と戦う。地球連合軍の指揮官が撃ち落されたら命令系統が途絶えてしまう、といった小賢しい理屈は米国人にとっては無粋にすぎない。生身で侵略者と戦うリーダーへの共感の前には理屈は無効だからである。

生身での戦いという原則に一見、反するかにみえる映画「エイリアン」として、例外ではない。確かに、この映画ではヒロインのリプリーはパワー・ローダーを装着して怪物と戦う。だが、パワー・ローダーというのがミソである。これは一種のパワード・スーツで、人間の筋力補強器具である。これを装着するのは人間の肉体能力それ自体を

補強するためであって、ベースはあくまでも自らの肉体なのだ。

ヒーローにとって選択肢は、戦うのか、戦わないのかの2つだけだ。二分法的思考法は安全な場所で指揮をとるだけという行動を許さない。そして、ヒーローが自らの肉体で戦う相手は、できるだけ分かりやすい「悪」の体現者であることが望ましい。「男の子の正義感」を際立たせるためには「100%の悪人」こそが理想的な敵役となる。純化した善悪二元論から導き出される論理的帰結といってよい。

問題は、かかる思考パターンに傾きがちなのが人類史上最強の軍事大国、世界の政治、経済を牛耳る覇権国家だということである。そして、この屈託なき二元論を可能にするのもまた米国の覇権的パワーであることだ。

谷崎潤一郎の美は明暗の境に

谷崎潤一郎はその著「陰翳礼讃」の中で「暗がり」の美を次のように説く。

「夜光の珠も暗中に置けば光彩を放つが、白日の下に曝せば宝石のように魅力を失うが如く、陰翳の作用を離れて美はないと思う。」

「美と云うものは常に生活の實際が

ら発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれわれの先祖は、いつしか陰翳のうちに美を発見し、やがては美の目的に添うように陰翳を利用するに至った。事実、日本座敷の美は、全く陰翳の濃淡に依って生まれているので、それ以外に何も無い。」

「西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、ただ灰色の壁があるばかりで何の装飾もないと云う風に感じるのは、彼等としてはいかさま尤もであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。」

谷崎はこのほかにも、障子越しの柔らかな光、椀の底の暗がり、廁などの例を挙げて、陰影の美を説く。薄ぼんやりした明暗の境の中に美が宿ると囁く耽美派文豪の筆致は官能的ですらある。

とはいっても、私はここで、日米の文化や美意識の違いを論じるつもりはない。ただ、光と影は日本では融合すべきものとして、西洋では相対峙して並存すべきものとして解されていたことを思い出すだけである。米欧文化の源たるギリシャ神話にいうアポロとディオニュソスはそれぞれ光と暗黒の神。「人間の美しい世界はアポロとディオニュソスとの二重性によって進展する」

と喝破したのはニーチェであった。

描き切れないブッシュ像

谷崎潤一郎の「陰影礼讃」にはオチがある。谷崎が家を新築する時の話だ。「陰翳礼讃」を読んで感動した建築士が谷崎のために暗がりや陰翳を最大限強調した家屋を設計した。だが、設計図を一瞥した谷崎は事もなげにこういったそうだ。「いや、やはり部屋の中は明るいほうが良い」。

谷崎の一筋縄ではいかない融通無碍な「したたかさ」。これこそがブッシュに欠けている資質であるのかもしれない。が、これをもってブッシュを単純な人格と決め付けるにはいけない。ブッシュのパーソナリティは歴代大統領のそれと比較しても、シンプルな形で像を結ばないところがあるからだ。

ここで、全くの独断で歴代大統領のパーソナリティについて「明暗」をキーワードにして一筆書き風にスケッチを試みるのも一興かもしれない。

ニクソンが「暗い謀略家」の風貌を醸し出しているとすれば、カーターは「明るくナイーブな道徳家」のイメージか。同様に、レーガンの「明るく強い家父長」、ブッシュ(父)の「苦渋

と弱さが同居する悲観家」、クリントンの「軽妙で実務能力に富む雄弁家」といったイメージが浮かび上がる。

しかし、ブッシュ現大統領の場合、一筆書きでは描ききれないところがある。イデオロギーが政策に直結するという理念型的性格に注目すれば「暗がり」に潜む一徹なファンダメンタリスト」のイメージが浮かぶ。原理主義者の真骨頂は大義追求に妥協を許さぬ点にあるからだ。だが一方、ブッシュの屈託なき力への信奉姿勢に着目すれば「明晰なリアリスト」といえそうな気もする。現実主義者の行動原理は本来、パワーの緻密な計算に基づくからだ。

私はこれまで、ブッシュ政権の特徴の一つは理念型政権の持つ「分かりやすさ」にあると考えていた。だが、こうしてみると、ブッシュのパーソナリティを論ずるに当たっては「分かりやすさ」に加えて、より屈折した部分にも注視する必要があるのかもしれない。

いよいよ佳境に入ったブッシュ政権の対イラク・北朝鮮政策の展開の行方。この問題への対応の「仕方」を観察することは、期せずしてブッシュのキャラクターを透かし見る機会となり得る。